國學院大學学術情報リポジトリ

# 森野正弘著『源氏物語の音楽と時間』



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 上原, 作和, Uehara, Sakukazu<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000165 |

〔書評〕

# 森野正弘著『源氏物語の音楽と時間』

上原作和

本書は森野正弘氏の二冊目の上梓となる。前著は博士論文『源氏物語の表現構造の研究—音楽関連描写における主題の展開』（國學院大學大学院文学研究科・一九九九年）の公刊であった。これも課程博士が実質上の解禁となった時代にあって、他大学に先駆けての試みであったが、少部数の学内助成出版であったことから稀覯本となっていたところ、本書は、前著所収論文に入念な推敲が加えられて、江湖の読者に迎えられるようになったことをまずは喜びたい。

著者と評者は、今も國學院大學針本正行研究室にて三十年近く継続している『うつほ物語』の輪読研究会（発足当初の主宰は室伏信助跡見学園女子大学名誉教授・当時兼任講師）を通じて、公私ともにいろいろな御教示を賜ってきた。数年前、著者の勤務先に所蔵されている長州・毛利家所蔵の漢籍目録の複写を依頼したところ、迅速に恵与してくださったことも忘れがたい記憶である。二〇一三年九月十四日には、著者の企画による山口大学時間学研究所のシンポジュウム（時間学アフタヌーンセミナーｉｎ東京「日記と時間」）に伺い、本書の理論的支柱である「時間学」の展開を日記文学に学ばせて頂いたのであった。

著者は、膨大かつ錯綜化する『伊勢物語』『源氏物語』研究

史を整理する能力において、学界屈指の力量を持つ。研究史に残る大著に関して、わたくしは、まず著者の見解を尋ねて研究史の位置を測定・確認するのが常であった。例えば、大朝雄二氏の大著『源氏物語正編の研究』（桜楓社・一九七五年）『源氏物語続編の研究』（桜楓社・一九九一年）に関する見解を披瀝されたときには、まさに蒙を啓かれた思いがしたものである。もちろん、最近の研究動向に関しても敏感で、わたくしが編集委員を務めた号の学界時評「「平成二十一（二〇〇九）年国語国文学界の動向・〈中古〉散文『源氏文化』研究の伸張とマイナーなものへの視線」（『文学・語学』第二〇一号、全国大学国語国文学会、二〇一一年十一月）は、その才能が遺憾なく発揮された典型例である。わたくしも自著の書評をお願いしたしたところ、勘所を押さえた一文を寄せて下さったことであった（書評・上原作和著『光源氏物語　學藝史―右書左琴の思想』」『日本文学研究』大東文化大学日本文学会、第四六号、二〇〇七年二月）。

さて、本書のもくろみは、著者自身により「源氏物語に描かれた音楽や時間にまつわる諸事象を、実体ではなくあくまでもことばとして見据え、多義的な言語観をもって読解する」ことだと、「序」で明示している。綿密、かつ周到に計算された書である。著者の方法の起点にあるのは、学部生時代、三根谷徹教授担当の「言語学概論」に遡り、ここでソシュールの構造言語学理論とその分析方法を会得したことに始まると言う。「実体論から関係論へ、そして、ことばの意味とが一対一で対応している一義的な言語観から、果てしなく意味が生成する多義的な言語観へという転回」と言う認識を前提として『源氏物語』を読んでゆくことが宣言されている。

また、時間論の「昔／古」の語義には民俗学の成果を援用しながら、「『源氏物語』の「今」に象徴される直線的な時間と、季節に象徴される循環的な時間とが拮抗する時空として現象」する物語の、「位相の異なる時間を可視化する手かがりとして、和琴をはじめとする音楽関連描写や、季節を象徴する〈みやび〉の営みの数々がある」とテクストの構造体を簡明に説明している。國學院の學統に培われた複合的な知見の成果と言えよう。

これは、従来の通時的言語観を縦軸に、ソシュール流の共時的言語観を横軸としつつ、物語に森野流の化学反応を加えることによって、可視化された物語の位相が本書の論攷群であるとも言える。その分析の過程で見えて来た『伊勢物語』『源氏物語』に描かれた時間、音楽、物語の表現と構造を解き明かした

のが、本書なのである。

以下、本書の「目次」である。

**序　源氏物語の音楽と時間**

**第Ⅰ編　時間の表現と構造**

第一章　昔（むかし）という時間／古（いにしへ）という時間／第二章『伊勢物語』二条后章段における時間の構造／第三章　紫の君と雛遊び・絵／箏の琴／第四章　時間に遅れる光源氏／第五章　薫物合せにおける季節と時間

**第Ⅱ編　音楽の表現と構造**

第一章　頭中将と和琴／光源氏と琴の琴／第二章　明石入道と琵琶法師／第三章　明石一族における箏の琴の相承／第四章　玉鬘と和琴／第五章　紫の上と和琴／第六章　柏木の横笛にまつわる逸話の諸相／第七章　宇治姉妹と箏の琴

**第Ⅲ編　物語の表現と構造**

第一章　明石の君と歌人伊勢／第二章　化粧する光源氏／目馴れる紫の上／第三章　組織化される夕霧の浮遊性／第四章　女三の宮の花の履歴／第五章　六条院のシステム分化／第六章　物語の語り

**初出一覧・あとがき・索引**

著者の研究の始発は、卒業論文「『源氏物語』音楽描写—宇治十帖の箏の琴」であったことが「あとがき」から知られる（第Ⅱ編第七章所収）。著者の代表的な論攷は拙編『人物で読む源氏物語』にも再録させて頂いた「頭中将と和琴／光源氏と琴の琴」や、「明石入道と琵琶法師」など、『源氏物語』音楽研究の金字塔とも言える必読の論攷が並ぶ。個人的には「化粧する光源氏／目馴れる紫の上」は講義の際によく触れる論文である。「女三の宮の花の履歴」は、『論叢源氏物語４』（新典社、二〇〇二年）で評者とともに「桐壺」巻の、『源氏物語』中、最も著名な本文異同である「未央の柳」を起点として女人達の〈喩〉の表現構造を論じたものであり、わたくしはこれを『源氏物語』本文史の分水嶺として、森野氏は花の喩を物語の人物造型の典型的な方法であるとして、これを横断的に読み解き、それぞれの研究キャリアにおけるエポック的論攷となったものである。

いずれの論攷も、二項対立型の「…／…」を有効に用いて、『源氏物語』の音楽と時間、あるいは物語表象を解明した力作である。これらは、方法論先行型の研究論文にしばしば見られる、理論提示がテクスト分析の比重を上回るようなアンバランスはない。きわめて洗練された思考と簡潔な説明により、強引な論理転回のない、穏当かつ冷静な分析例とその状況把握と

なっている。このことが、本書の最大の特徴である。

ただし、不満もないわけではない。例えば、現在の物語研究の限界でもあるが、底本は『伊勢物語』『源氏物語』、ともに藤原定家の校訂本文の再建を目指した現代の校訂本文によったものであり、本文異同の参照に関して手続き上の問題はないとしても、いわば「定家本本文のソシュール流分析」であると規定することも出来る。例えば、定家が後人の編纂物とする狩使本（小式部内侍本）を分析の対象とすれば、二条后章段の構成は存在しない。くわえて、立論の前提となる歴史的文脈を生成させる指標たる「後人注記」の存在も確認されていない。したがって、これは成立過程論にも照応せず、定家本にのみ通用する論理であるから、第Ⅰ編の精密な『伊勢物語』の時間論は、定家の編纂意図の分析であることになろうし、先に触れた、「女三の宮の花の履歴」も定家本本文を基幹とした分析であるから、同様に、定家の添削によって生成された本文表象の分析結果であったことになる。

さらには、『伊勢物語』初冠章段の「女はらから」理解は、従来の「同腹の姉妹（女ふたり）」説に依拠するものであって、「昔男の異母妹（女ひとり）」説（室伏信助「『伊勢物語』の成立展望」『王朝日記物語論叢』笠間書院、二〇一四年、初出、同氏編『伊勢物語の表現史』笠間書院、二〇〇四年）は顧慮されない。ただし、室伏説の初出誌には森野氏自身が二条后論を寄せていたのであるから、本書所収に関して、一言付言する義務があったと言わねばなるまい。

関連して、「紫の君と雛遊び・絵／箏の琴」に関する、光源氏・紫の君との関係を説くのに際し、「妹背」を、「兄妹」の意に介するのは、一般論の援用ではあるが、三巻本（定家本）『枕草子』「里のまかでたるに」の段を参照すると、これは成り立たないのである。言うまでもなく、左衛門尉・橘則光は清少納言と婚姻関係にあったとされるが、互いを「妹背」と呼び、周囲の人々は清少納言を則光の「いもうと」と呼んでいたことが明記されているからである。このふたりはほぼ同年齢であると推定され、史実年時の長徳二、三年（九九六、七）となれば両者は三十路の大人であって、紫の君のような「幼さ」「未成熟」の微塵もない。用例の検討は不断に行うべきことが痛感された説述であった。

注記に関しても、初出時に掲出した論攷に限られ、発表以後の論攷が加えられていないことも惜しまれる。「物語の語り」には藤井貞和・人称論への言及が欲しかったと思う。

もちろん、森野氏の学問の基底が堅実な注釈に立脚したもの

であることは、『源氏物語の鑑賞と基礎知識・三四、若菜下（前半）』（至文堂、二〇〇四年五月）の（「六条院の女楽」の章の注釈、「琴の琴の伝授」「女楽とその意義（一）（二）（三）」）を筆頭として、当該シリーズには複数の巻に卓越した文献整理と論理を提示していることから、以上のような瑕瑾は、今後の課題として頂きたいことと言う要望に留まる。

かくして、『源氏物語』研究の先達として、極めて特上の良書を世に問うた著者・森野正弘氏の研究動向に目が離せないことは、充分、お分かり頂けたかと思量する。紙幅の関係から多くの卓説の一部の紹介に留まったこと、また最後に瑕瑾を論うことになった非礼をお詫びする。

（A5判、四九四頁、新典社、二〇一四年九月刊、定価一四、二〇〇円＋税）